mediopos 4

2015.1.30～2015.2.23

【神秘学ポエジー～風遊戯　第 13 集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団

mediopos-76
2015.1.30

■坂部恵「<かげ>についての素描」(『坂部恵集３／共存・あわいのポエジー』(岩波書店　20007.1)
「<かげ>という日本語は、元来、<影><映像>という意味とともに、<光>という意味をあわせもったものであった。<光>もまた一つの<かげ>として、もろもろの<かげ>を<かげ>たらしめながら、<映し>、<映り><移り>ゆくことをおいてはみずからの存立の場所をもたない。古代人は、<月かげ>や<火かげ>の中に、生きた現前としての<生>よりも、むしろ時間性と有限性の真の原点としての<死>の<かげ>をより多くみとめたのかもしれない。」
「ある一つの社会の文化は、かならずその<かげ>の部分をもち、そこにおいて、おそらくもっとも正確に、みずからをあらわす、ある文化における<かげ>の潜在的な記号学の体系のもちうる射程は、その文化のもつ深さと豊かさと厳密に等価である。<他なるもの>としての<かげ>の部分、みずからの欠くべからざる分身であり同時にまたみずからがその分身でもある<かげ>の部分への生きた感覚を失った文化は、早晩その総体のかたちを失って解体するだろう。」

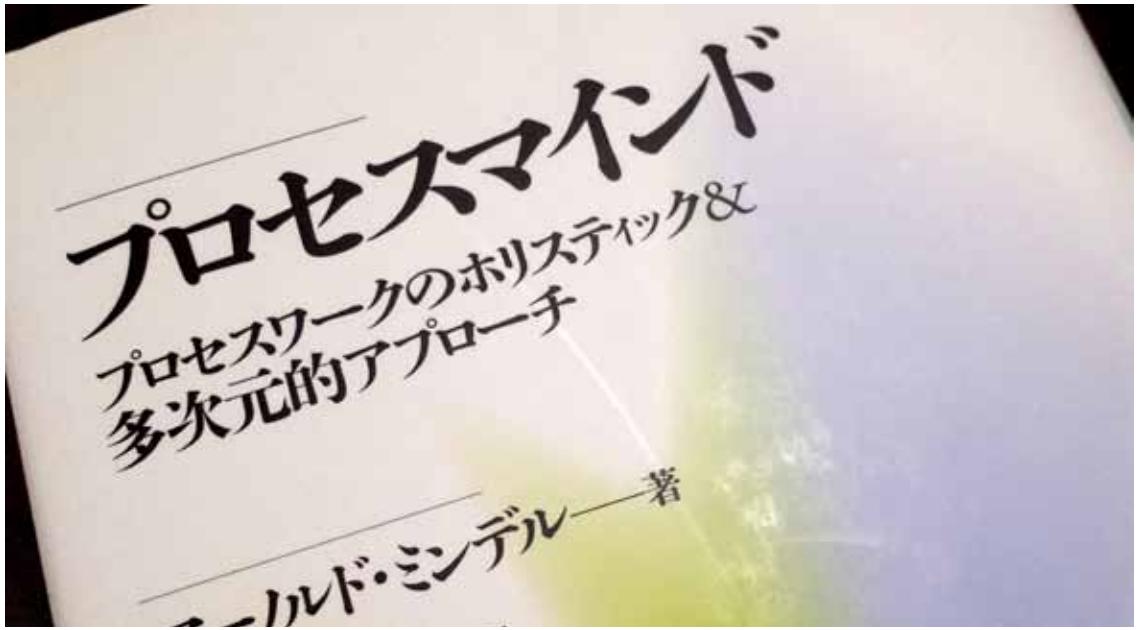
わたしは　うつし　うつされて
かげの　せかいに　うつりゆき
わたしは　うつし　うつされて
ひかりのなかに　うつりゆく

ゆめと　うつつの　かがみのなかに
つきかげ　ほかげ　ゆらめいて
おもてと　うらを　まじわらせ
わたしは　あなたに　こいをする

いきて　いきて　いきぬいて
しして　しして　しをつくす
ひかりのなかに　かげをみて
かげのなかに　ひかりをやどし

わたしは　うつしうつされて
ゆめと　うつつを　うつりゆき
ひかりと　がげの　うつしえの
あなたとともに　たびをゆく

mediopos-77
2015.1.31



■アーノルド・ミンデル『プロセスマインド／プロセスワークのホリスイティック＆多次元的アプローチ』（春秋社　2012.10）
「私は、中央アフリカと南アフリカの力強いコミュニティ倫理、ウブントゥという考え方に心を動かされてきた。ズールー語でウブントゥは「すべての人間／人類をつなぐ普遍的な絆への信念」を意味する。反アパルトヘイト活動家で、南アフリカ元大統領であるネルソン・マンデラは、ウブントゥの倫理を簡潔に説明する…「私が在るのはあなたが在るからです」。南アフリカの「真実と和解」政策の基本となっているこの倫理は、エンタングルメントやコミュニティという考え方のエッセンスを示す良い例となっている。「あなたのためでなければ、私はここにいないでしょう。そして、あなたがここにいなければ、私もまたここにいないでしょう。」／プロセスマインドの観点からすると、ウブントゥは量子エンタングルメントや非局在性、すなわち多様性のあるコミュニティにおける万物（宇宙全体）を結ぶ夢のようなつながりに基づいている。別の言い方をすれば、私たちは私たちを「フラートする」万物との相互関係の中にある。「私が在るのはあなたが在るからです」。私たちのコミュニティが在るのは、宇宙の中の他のあらゆる人間のコミュニティと非人間のコミュニティが在るからである。ウブントゥは、他のすべての部分との局在的かつ非局在的な連関を通じて生態系の一部分である生命が息づいているという意味において、プロセス指向のエコロジーである。
＊エンタングルメント（もつれ）：料理力学から借用したメタファー。個人間あるいはグループ内において、ある感情システムの諸部分が、既知の因果的な関連だけでなく、まるで諸部分間に分離がないかのような非局在的な手段を通じてつながっているという経験を意味する。
＊フラート：あなたの注意を引こうとする。ちらっとよぎる、ほんの一瞬のシグナル。たとえば、花があなたを「フラート」するかもしれない（その反対も同じ！）。フラートはとても素早く瞬時に生じるので、普通私たちはそれを見逃したり忘れたりする。しかしコミュニケーションにおいて、シグナルに先行するフラートは重要な役割を演じる。

あなたがいるから
わたしはここにいる

あなたがいないとき
わたしはここにいない

あなたが歩くとき
わたしはともに歩く

あなたが笑うとき
わたしはともに笑う

あなたが悲しむとき
わたしはともに悲しむ

あなたが愛するとき
わたしはともに愛する

あなたがいるから
わたしはここにいる

mediopos-78
2015.2.1

世界を観るためには
誇り高き眼を求めよ

空高く舞う鷹のように
天空はるかな孤高の星のように

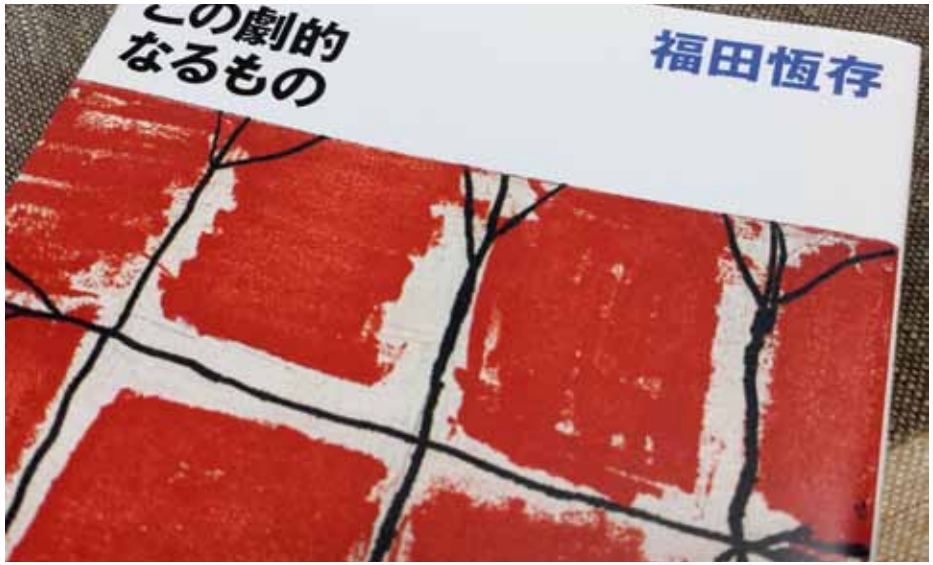
世界を聴くためには
みずからを啓く耳を求めよ

耳聡く注意深い鷹のように
天と地に張られた弦を奏でる風のように

■大塚紀子『鷹匠の技とこころ／鷹狩文化と諏訪流放鷹術』(白水社　2011.9)

「鷹は有史以前から人とともにあり、人は鷹狩を試みることによって鷹と関わってきた。そのために、野生の鷹を調教する術が生まれた。鷹がいかに誇り高く、神経質で警戒心が強いのか、そして人と同じようにストレスに弱いのかを人は理解し、克服しようとした。／（・・・）鷹狩は人と鷹によって築かれた文化であり、その技術は口伝と体得によって伝承されてきた。鷹と自然、そして鷹匠が一体となって生き残ってきたからこそ、その歴史は紡がれてきたのである。／（・・・）鷹は忍耐や感謝といった多くのことを私たちに教えてくれ、そしてその誇り高い振る舞いは、生を全うすることの美しさを私たちに見せてくれる。鷹を最も理解してあげられる存在であるからこそ、鷹匠の存在する価値がある。そして鷹とともに文化を築いてきたからこそ、鷹のかわりに文化を伝える責任があるのである。鷹匠を職として生きる、生きないという問題ではなく、名人かどうかということでもない。鷹匠の魂を持った者であれば、たとえどのような職種につき、どのような土地で生きたとしても、鷹匠の眼を持って世界を見ることができる、ということなのだ。」

mediopos-79
2015.2.2



演戯せよ
世界劇場はここにある

日常に屹立せよ
みずからを観る眼で

演戯せよ
みずからを観客として

天に向かって立ち上がるためには
独楽のように旋回し続けねばならない

演戯せよ
みずから記し続けながら

演戯せよ
美しく張られた弦を奏でる竪琴のように

■福田恆存『人間・この劇的なるもの』（新潮文庫　昭和３５年８月）
「自分を他人に見せるための演戯ではない。自分が自他を明確に見るための演戯である。こまが完全に回転しているとき、それは静止の状態を呈する。が、やがて力が衰え、ぐらつきだし、ついに倒れる。この運動をフィルムに写し、逆に映写してみればいい。こまは、はじめ地上をのたうちまわり、なんとかして立ちあがろうと努める。やがて円盤が地上を離れる。そして最後に、心棒は地上に垂直に立ち、静止状態に至る。それと同じように、私たちの意識は、平面を横ばいする歴史的現実の日常性から、その無際限な平板さから、起きあがろうとして、たえずあがいている。そのための行為が演戯である。（…）ひとは、生きていくうえに、それを必要としている。そして、多かれ少なかれ、意識するとしないとにかかわわず、だれもが平生それをおこなっている。／演戯によって、ひとは日常性を拒絶する。日常的な現実は私たちを自分の平面に引き倒そうとして、つねに寝技をしかけてくるからだ。私たちはそれに負けまいとする。あくまで地上に、しゃんと立っていようとする。そのための現実拒否なのだが、それは現実からの逃避ではない。逃避（…）現実を足場とし材料として、それを最大限に利用しなければならぬのだ。現実と交わるというのは、そういうことである。私たちの意識は、現実に足をさわられぬように、たえず緊張していなければならぬと同時に、さらに、それを突き放して立ちあがれる「特権的状態」の到来を、つねに待ち設けていなければならない。」

mediopos-80
2015.2.3

■立川昭二『からだことば』(早川書房　2000.6)
「「からだことば」というのは、「手」とか「足」とか、からだの部位を含んでいることばです。からだ語とか身体語ともいいます。たとえば「手」ですと、「手先」とか「相手」といった熟語、そして「手を抜く」とか「手が出る」などの慣用句ーーふだん何気なく使ういいまわしーーでよく使います。たんに「手が出る」だけでなく、おいしいものを見ると「のどから手が出る」などともいいますね。」
「からだにはいろいろな部位があり、それにまつわることばがたくさんあるのですが、そういうことば、からだことばが、今急速に消えつつある。／（・・・）人のからだには遠い歴史や深い文化がひそんでいます。からだをほんとに知り、からだをほんとに生きていくには、からだにかくされた歴史を知り、からだに息づいている文化を感じとらなければなりません。」
「「骨が折れる」ということばが消えていきつつある。そうなると、からだを尽くして骨が折れるような思いをしたり、人のために骨を折るような努力をしたりすることがなくなってしまうのではないか。ことばが消えることによって、そのような行為も消えてしまうのではないか。」

からだ　言の葉
芽を出し　繁る

言の葉　なくし
からだもなくす

からだをなくした
言の葉　どこへ

岩場に落ちた種は枯れ
ゆくえを失くした葉は朽ちる

からだ　言の葉
繁り　花咲き　実るなら

鳥鳴き　星は瞬いて
やがて　天と地　むすびあう

mediopos-81
2015.2.4

■堀田善衛『時代と人間』(徳間書店　2004,2)

「私の歴史観は、歴史というものを進行形では考えないのである。つまり、現在を現在として、そして、過去は過去、未来は未来と劃然と割ってしまうと、これはもう歴史の重層性を見失い、時間の実態をなくしてしまう。今は今として、“いまどき”とか、過去は“昔むかし”とか、未来は“この先”とか、そういうふうにしていくと時間の実態が入ってくると思う。／（・・・）その時間の実態は、ある地域――国とはいわない――は現在も十三世紀のような戦国時代にあるかもしれないし、戦国時代にある地域は現在も生きているかもしれない。しかし、それを“後れている”と取ってはならない。“後れている”“進んでいる”ということですべてを切ってしまうと歴史の実態は見えず、まことに味気ないことになってしまう。／（・・・）人間の存在は、たとえば巨大な曼荼羅の図絵のように、未来をも含む歴史によって包み込まれていると思う。／よく、「歴史は繰り返さず」というが、このことばにはもう一つ、「歴史は繰り返さず、人これを繰り返す」ということばがくっついていたはずである。

歴史曼荼羅のただなかで
私はかつてどこにいて
やがてどこへとゆくのだろう

私は私をつくり
私は私につくられながら
歴史曼荼羅を描き続けている

私は私を繰り返し
私の曼荼羅のなかで
いつも今を生きているのだ

この時代のなかで
今を生きる私よ
みずからの曼荼羅を観想せよ

mediopos-82
2015.2.5

■高桑信一『山の仕事、山の暮らし』(ヤマケイ文庫 2013.3)
「おりから各地の山岳で入山規制の問題が起きている。それは私から見れば、山に暮らすひとが少なくなったからである。炭焼きが消え、ゼンマイ採りが消えて、まだそれほどのときが経たないというのに、山に遊ぶひとたちによって山が荒れるなら、入山を封じてしまえばいい、と考えるひとが多いのは、山に背を向けて暮らす世代が増えたからにほかならない。／古代、ヒトは山に暮らした。生活の糧を得るには、海辺よりも山のほうが住みやすかったからだ。それが弥生時代に稲作がもたらされることによって、ヒトは次第に里に降りていった。文明の発達にともなって、これからも人間はますます山を捨て、保全や管理と称して、機械力で自然を意のままにしようとするだろう。けれどいつかは知らず、科学の最先端を希求するひとびとが増えるにつれて、二極分解のようにして原生の森を生活の糧として見直さなくてはならない時代が必ずくる、と私は固く信じている。」

森から里へ
里から森へ

森と川と魚と水と人を
むすぶ糸は見えないか

木を植えて
ひとまず育つまで４０年

けれど見捨てられた山林は
放置された子どものように荒れてしまう

むすぶ糸を切られたとき
水も魚も荒れはててしまう

森と川と魚と水と人を
むすぶ糸のために

われらの内に眠る
森の人よ　よみがえれ

mediopos-83
2015.2.6

■斎藤たま『まよけの民俗誌』(論創社　2010.2)
「近頃まで私たちの身の回りにはまものがいた。今だっているかも知れないが、多くのところでは住む場所を失ったのではないかと思う。／まものがどんな姿をしているか、これはまだ誰も見たことがないのでわからない。目に見えない、これがまものの一大特徴なのである。／けれども性格ならよく知れている。やたらと人の平安をうらやむのである。人の幸せ、喜びが妬ましくて堪らない。うの目たかの目、邪悪な目で人々の間を漁り歩くのだ。」

まものがいなくなって
人がまものになった

人のまものは心がまもの
人のまもののまよけはなあに

お金のおふだに
肩書きのおふだ

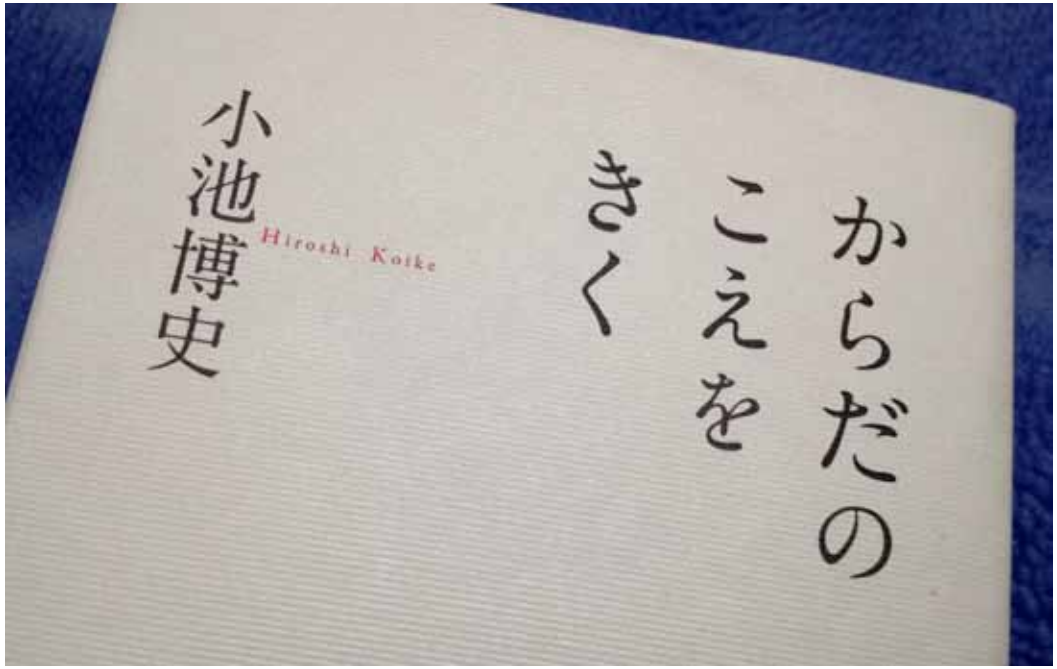
まよけをしてもまものは減らぬ
心の闇は深まるばかり

まものはじぶんが見えないのだ
じぶんの悲しみを見ることに耐えられないのだ

まものがいなくなって
人がまものになった

まものは闇をさまよって
あらたなまものを生むばかり

mediopos-84
2015.2.7



■小池博史『からだのこえをきく』(新潮社　2013.12)
「世の中には少数の開放的な人間と多数の閉塞型人間がいるが、からだを活性化させ、自身が自身の主役になり得るのだと意識転換できるや否や、ほとんどの人々は自分の殻から脱しようとしはじめるということ。すなわち、「からだ」が活性化すれば「感性」が、目覚め、モノの見方に広がりが出て、能動的になる。また、誰もが人の従属物ではなく、自身が主役だとの意識を持つことができれば、場はそれだけで活性化する。／私たちは原点に立ち返らなければなりません。学問とは？　仕事とは？　人のためになるとは？　芸術とは？　文化とは？　感性とは？　生きるとは？　死ぬとは？　さらには「私」とは何か？　原点を見つめ返しながら古（いにしえ）を思い、周囲の世界を見渡しては、全身で感じ取り、受け止めてみる。ミクロ界とマクロ界を往還しながら熟視すれば、現場の異様さがひしひしと伝わってきます。／すべては複合性を持った感性力のある「からだ」からはじまるのだと認識した上で、誰もが「私」は何ができるかを真摯に考え、実行に移していくしかないのです。」

問いがたりない
問いの問いがたりない
問いの原点がたりない

自由がたりない
自由の自由がたりない
自由の原点がたりない

見ることがたりない
見ることを見ることがたりない
見ることの原点がたりない

聴くことがたりない
聴くことを聴くことがたりない
聴くことの原点がたりない

学ぶことがたりない
学ぶことを学ぶことがたりない
学ぶことの原点がたりない

私は原点へとダイブする
私が私であることの原点へと立ち返り
私が覆い続けてきた殻から脱皮しはじめる

mediopos-85
2015.2.8

■唐木順三『無用者の系譜』(筑摩叢書　昭和２９年４月)
「日本には昔から今にいたるまでなぜかくも無用者が多いのか。質において高い者が、なぜ意識して無用者となったのか。(…) ／現実社会で勢力あるものと、思想や文化に携わる者とが不幸にして分かれていたということもある。俗世間とは異なるところに文雅な世界を築かざるをえない事情が、日本の歴史の中にあったことも事実である。(…) 総じていえば、日本の歴史や社会の条件が、殊に中世以降、多くの無用者を生んだことは否まれない。／ (…) 雅と俗、虚と実、想と実、空と色、さういふ二元がでてきたのは、一方では歴史や社会の条件からであろう。歴史や社会の条件から生みだされたといふ発生時間を無視して、ひとたび、雅や虚や空にいたりついた者は、それを本質的に先なるものとして自覚する。世間無常、諸行無常において反つて常を自覚し、遁世、韜晦において反つて真の現実を自得し、旅こそ栖家という逆説を実行することが起る。実が虚によって、学が空に貫かれて、反つて本来の面目を発揮するといふことは単に議論の遊戯ではない。すぐれた詩人が事実によつて示してゐるところである。(…) 虚や空や詩を、歴史の条件や科学の進歩でぬりつぶすことはできないのである。そして虚や空を反つて現実の根底とする伝統が、日本において実践的にうけつがれてきたのである。」

とかくこの世は
役立つ者ばかりが声高い

我が天の邪鬼は
かくして無用者をめざす

目指さずして
すでに我は無用者

政治のむき経済のむきに
そしらぬ顔をしてうそぶく

虚虚虚と鳴いて
世間虚仮諸行無常を詠う

それでなくては世は見えぬ
それでなくては死も見えぬ

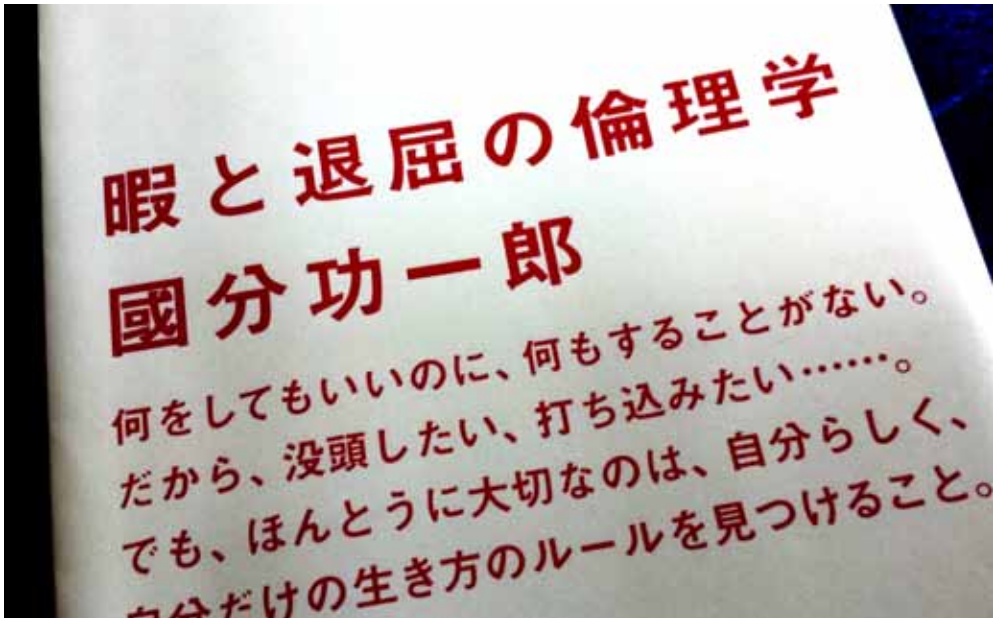
とかくこの世は騒がしい
騒がしくすると心を亡くす

とかくこの世は正邪が多い
正邪を掲げ戦うほどの党派は持たぬ

我は生来無用者
無用者ゆえに虚を栖家とする

我はひとり歩いて
無用者の道をゆく

mediopos-86
2015.2.9



■國分功一郎『暇と退屈の倫理学』(朝日出版社　2011.10)
「かつてイエスは「人はパンのみにて生きるにあらず」と言った。／吉本隆明はこの言葉を解釈して、人はパンだけで生きるのではないが、しかしパンがなければ生きられないことをイエスは認めたのだと言った。／モリスの思想を発展させれば次のように言えるのではないだろうか、／――人はパンがなければ生きていけない。しかし、パンだけで生きるべきでもない。私たちはパンだけでなく、バラも求めよう。生きることはバラで飾られねばならない。」

パンのためだけに生きるならば
パンは決してその存在を全うできないだろう

自由のためだけに生きるならば
自由に縛られたままであるように

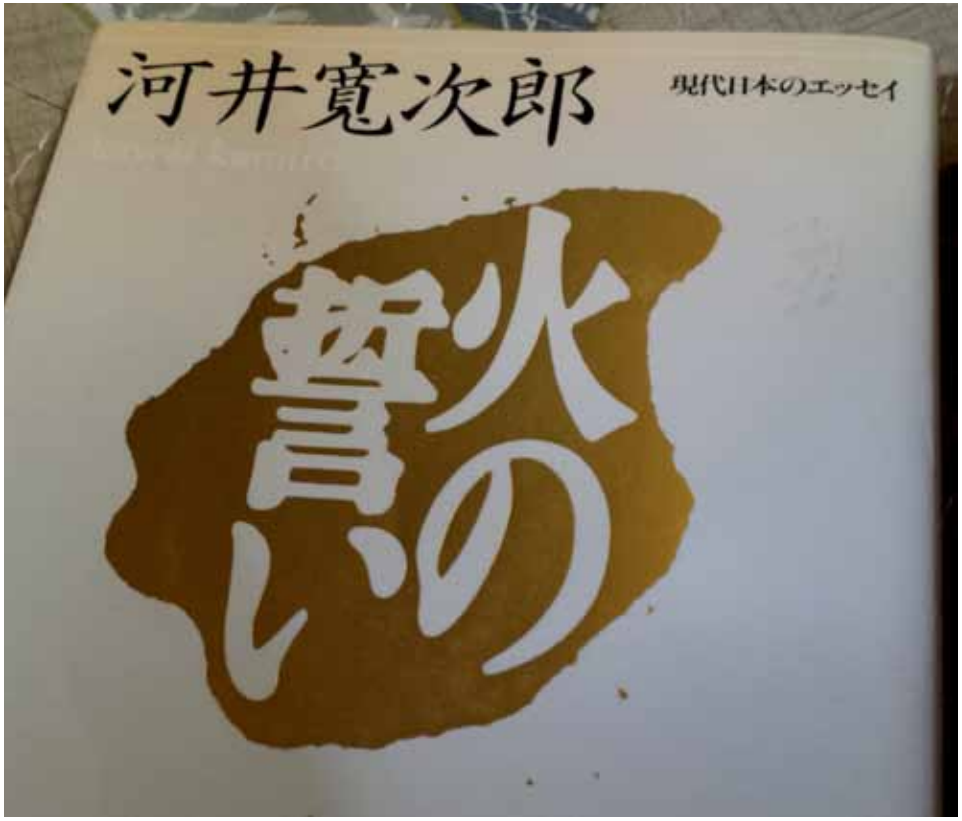
欲望を満たすためだけに生きるならば
欲望は決して解き放たれることはないだろう

たとえ一度は満たされたとしても
あらたな渇望が身を焦がしてしまうように

暇と退屈があなたを空虚にするとき
それはあなたになにを告げているのだろう

空虚を埋めるものが永遠へ向かう道でないならば
それはただぐるぐるとめぐっているだけなのだ

mediopos-87
2015.2.10



■河井寛次郎『火の誓い』(講談社文芸文庫　1996.6)
「悪はすべての人を愛している。悪はすべての人に愛されたがっている。悪はすべての人のものになりたがっている。」「助からないと思っても助かっている。／人は善美の中にいながらこれを拒む事に努力している贅沢者。こんな贅沢者さえ善美は包む。放ったらかされてはいない。放ったらかされてはいないのに、人は放ったらかされていると思いたくて仕方がないのだ。／あるままでない。／きたないままできれい。／不安なままで安心。」

木の葉一枚落ちるも
神のてのひら

逃げようとしても
逃げられはしない

悪のお役目あるとしても
すべては神の微笑

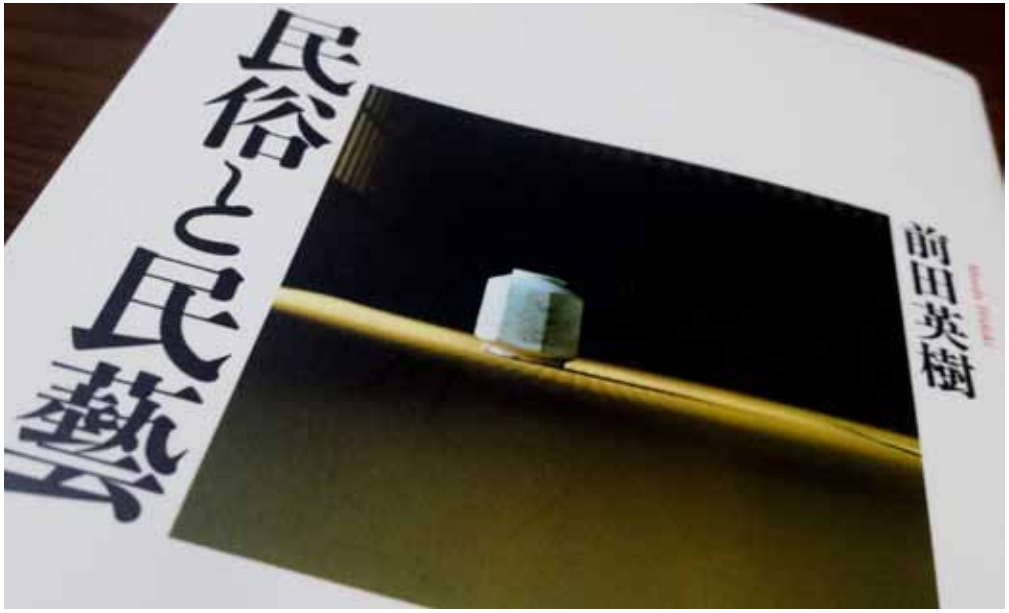
きたないはきれい
みにくいはうつくしい

苦しみも楽しみ
不安も安心

誓わずとも誓っている
助からないことはできない

拒んでも拒むことはできない
愛されないことは決してできないのだから

mediopos-88
2015.2.11



■前田英樹『民俗と民藝』(講談社選書メチエ 2013.4)
「柳宗悦が李朝、沖縄の工藝のなかに直に観たものは、容易には説明し難い<物の始めの形>だった。これは、初期の未成熟な形のことを言うのではない、生まれる力のみずみずしい永遠の反復を言うのである。柳の主張する「正しい工藝」には、いつもこの永遠の反復という姿があり、それは暮らしの「正しさ」からしかやってこない。この「正しさ」のことを、彼は「他力」とも呼んだ。神仏に一心を預けきってただ無心に、ひたすらに働くこと、このような労働から日々生まれてくる慎ましく、また驚異的な作物がある。これらに優る個人の芸術品など、ほんとうにはありはしない。彼は、そう信じるのである。/<物の始めの形>という言葉は、実は柳宗悦のものではなく、柳田圀男の『海南小記』に収められた「与那国の女たち」(大正十年)という文章にある。/(・・・)この「物の始の形」というのは、過ぎ去って帰らない起源のこととは違う。むしろ、その物を、その物にし続ける永遠の潜在的原理である。言い換えれば、原理としての潜在的な<日本>が沖縄にある。その直観において、柳田の民俗学と柳の民藝思想とは、深く結びあっている。」

ほんとうの声は
永遠の反復のなかで訪れ
私の声という場所で啓かれてゆく

ほんとうの形は
永遠の反復のなかで訪れ
私のつくる物という場所で啓かれてゆく

私のほんとうは
永遠の反復のなかで訪れ
私という場所で啓かれてゆく

永遠の反復するすべての場所で
声なき声　形なき形
私なき私が啓かれてゆく

mediopos-89
2015.2.12

■吉田秀和『永遠の故郷』(集英社 2008.2-2011.1)
「歌をめぐって、心の赴くまま、あれこれと書いているうち「歌曲」というものがどこか非常に深くて遠い地下の暗闇から生まれてきて、しばしの時を私と一緒に過ごしたのち、またもとのところに戻っていってしまうもののように思われてきた。歌が生まれ戻ってゆくところ、それがどこであるかはわからない。私のいったことにない場所だろう。でも、それは歌を通じて私と、かりそめの時とはいえ、一刻を強く結ばれた懐かしいところであり、歌をきき、歌を歌い、それについて書いていると、ずっと昔からそこの何かと音信していたのかもしれないという気もしないではなくなってくる。」

言の葉は歌から生まれ
歌は永遠の故郷から生まれた

やがて歌は永遠の故郷から切り離され
言の葉は歌から切りはなされてしまった

言の葉に歌を取り戻さねばならない
歌に永遠の故郷を取り戻さねばならない

風にそよぐ言の葉
季節とともに繁り色づき
やがて散り敷く言の葉

鳥と鳴き交わす歌
天から降るように訪れ
地から湧き出す歌

私は歌から生まれたのではなかったか
その歌から言の葉が奏でられたのではなかったか

歌を忘れた鳥の私は
永遠の故郷へと旅立つ夢をみている

mediopos-90
2015.2.13

■ソーア・ハンソン『羽／進化が生み出した自然の奇跡』(白揚社 2013.5)
「空を飛ぶことを夢みていたレオナルド・ダ・ヴィンチは、空を飛べる機械を開発できたら、「永遠の栄誉」を受けるだろうと書き残している。ダ・ヴィンチは十六世紀の初頭に、トビやヒバリなどイタリアの田舎で普通に見られる鳥を注意深く観察して、後に「鳥の飛翔に関する手稿」と呼ばれるようになったノートに書き記した。そこには、今では有名になった原始的なヘリコプターや、ダイダロスが作ったような羽ばたき機などのイラストが描かれているが、最も重要な絵は余白に簡単に描かれた小鳥のスケッチであろう。ハトのようだが、飛翔中のさまざまな姿勢が描かれているだけでなく、翼の上と下を流れる空気が線で示されてもいるのである。空気の「濃さ」や「薄さ」という語が添えられており、ダ・ヴィンチが翼の形の重要性や機能を直感的に理解し始めていたのは明らかだ。」

永遠を翔ぶ翼はないか
我は空を仰ぎ永遠を願う

永遠を見る瞳はないか
我は見えぬものを観たいと願う

永遠を聴く耳はないか
我は聴こえぬものを聴きたいと願う

永遠にふれる指はないか
我はふれえぬものにふれたいと願う

永遠へむかう魂はないか
我はかぎりなき虚空を見つめ永遠を願う

mediopos-91
2015.2.14

■高橋敬一『昆虫にとってコンビニとは何か？』(朝日新聞社 2006.12)
「昆虫という言葉を聞いて私たちが連想するものは、オオムラサキだとか、あるいはニッポンセスジダルマガムシとかいったように、ある特定の昆虫種である場合もあるし、自分が住んでいる地域に棲んでいる特定の個体群（…）である場合もある。たとえば△△市内のゲンジボタル個体群、あるいは家の庭木に発生したチャドクガの個体群といったように。そしてまたあるときは、特定の種に属する個々の個体を指すこともある。たとえば目の前にいる一頭のアトコブゴミムシダマシ、などという場合がそうだ。「昆虫にとって○○とは何か？」を考える場合、その答えはこれら種、個体群、個体のレベルで、当然のことながら異なってくる。／同じことが人間について考える場合にもあてはまる。ある事柄に対して、人間（…）という種のレベルで考えるのか、ひとつの国民やひとつの家族といった個体群レベルで考えるのか、あるいはまた自分という一個人のレベルで考えるのかで、答えはまったく異なってくる。（…）／種、個体群、そして個体。それらはすべて同じ種に属する個体によって構成されるものではあるが、その一方で、それぞれを異なってものとしても扱わなくてはならない。私たちはしばしば無意識のうちに、あるいは意図的に、これら三つのレベルを混同してしまいがちだ。」

私はいったい誰だろう

私にとって生物とは何か
私にとって脊椎動物とは何か
私にとって哺乳類とは何か
私にとって人間とは何か
私にとって日本人とは何か
私にとって素性とは何か
私にとって県民とは何か
私にとって市民とは何か
私にとって住民とは何か
私にとって私たちとは何か
私にとって私とは何か

私は誰でもない私になって
あらゆる姿の私を見ている
すべてが私であり
すべては私ではない

私はいったい誰だろう

mediopos-92
2015.2.15

ぼくの「まえ」にくるのは未来だろうか
ぼくの「あと」にくるのは過去だろうか

「まえ」に見た景色の記憶が浮かび
「あと」で会おうと君に話したりもするのに

ぼくたちはいつのまにか
空間を時間にしてしまってはいないか

ぼくたちのなかでひろがっている世界を
いろんな記号にして直線のように並べてはいないか

ぼくのほんとうの「いま」はいったいどこにあるのだろう
からだは知っているのにあたまは知らずにいたりするのだ

■川田順造『コトバ・言葉・ことば／文字と日本語を考える』(青土社 2004.4)
「ここで考えさせられるのは、文字を用いる、つまり紙や板などの平面という二次元空間に記された視覚記号を通して、概念化され、ある意味で縮小された次元でものをとらえることに慣らされた人間の、「二次元的思考」とでもいうべきものについてだ。暦、年表、時計の針の文字盤など、すべて文字を使った時間の空間化だ。時間という、元来体内感覚に対応する一次元のものを、縮小され、視覚化された二次元空間に、文字を使って概念化されたかたちで表象する。過去、現在、未来といったものも、実体として直線上にならんでいるかのような錯覚が生まれる。／文字を用いない社会で暮らしていると、縮小され概念化された二次元表象から一切自由な、実物大の身体感覚の世界に人間が暮らしているということが「身にしみて」分かるし、アフリカのことばに誘われて思い出すのが、元来文字なしで使われていたはずのやまとことばだ。モシ語で道を教えるのに、あのバオバブの樹の「まえ」「さき」を右（リトゥゴ＝食べる手）の方に曲がれと言いたいときには、樹の、「うしろ」「あと」（ポーレン＝背中）で曲がれという。自分が歩いていってそこに身を置いたとすれば、背中の側で曲がるべきなのだから。逆に、樹の「うしろ」「あと」側なら、「まえ」（タオレ＝進んで行く広報方向）となる。一瞬調子を狂わせられるが、これらのことばは、時間的な継起の前後を示すのにも用いられ、合理的である。そして「まえ」「さき」「あと」など、本来の単一の意味場が、二次元的思考からは両義的と見なされるかも知れないやまとことばたちのことを、私は思い出すのだ。「まえのかみさん」というときと、給金を「まえ借りする」というときの「まえ」の意味、「さき程は失礼しました」と、「それはまださきの話だ」、「あと始末をする」と「あとで会おう」等々。」

mediopos-93
2015.2.16

■『武満徹　エッセイ選／言葉の海へ』（ちくま学芸文庫 2008.9）
「音は消える。だが案外、人間は、その音の性質（本質）に気付いていない。当たり前のこととして忘れている。殊に、現在の私たちの生活環境は、音というものの、その大事な本質を見失わせるような方向に、極端に、進んで来てしまっている。それで、音の専門家すらが、いまでは、音は消えるものだということを、すっかり、忘れている。／（・・・）音は消えるどころか、私たちは、いま、目には見えないが、日々貯えられている膨大な量の音の堆積のなかに、埋もれて、生活している。したがって、消えゆく音を追う、内なる耳の想像力などは、もはや音楽創造（作曲）には必要とされていない。と、そう考えたくなるほど、今日、私たち（人間）の耳の感受性は衰え、また怠惰になってしまった。音は消えずにいつも周囲にある（という、実は、錯覚に慣らされている）ので、沈黙の偉大な光景を想像の内に再生することなど、もはや、きわめて困難なことだ。」

音はどこから訪れ
どこへ消えるのか

沈黙という虚空に
私は耳を澄ませる

世界はどこから顕れ
どこへ消えるのか

無という虚空に
私はみずからを投げ入れる

私はどこから訪れ
どこへ消えるのか

死という虚空へと
私は生を澄ませてゆく

mediopos-94
2015.2.17

天の秘密は地に隠され
地の秘密は天に隠されている

天は地の夢を見
地は天の夢を見ているのだ

そうして天と地は
神秘のうちに結ばれてゆく

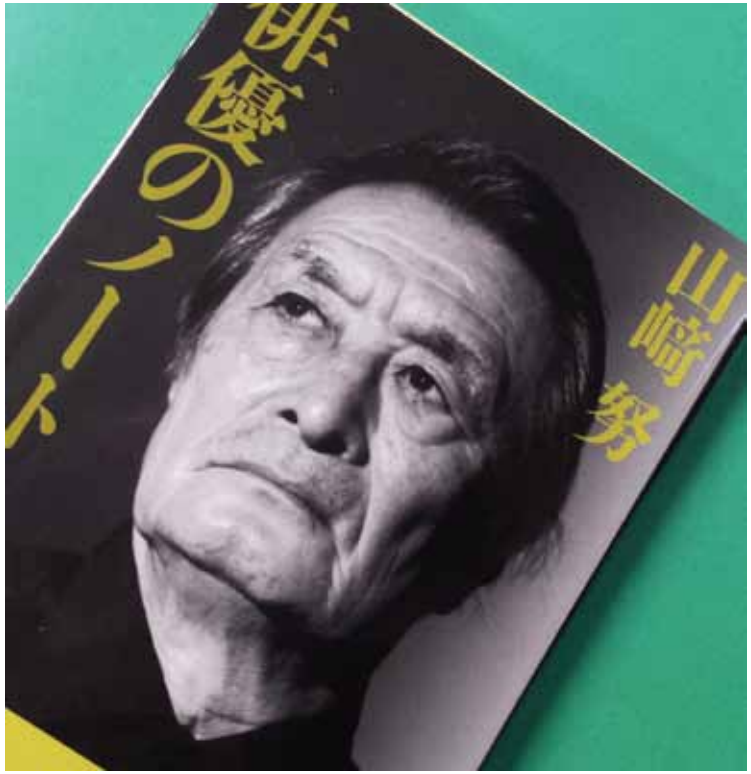
霊の秘密は物に隠され
物の秘密は霊に隠されている

霊は物の夢を見
物は霊の夢を見ているのだ

そうして霊と物質は
神秘のうちに結ばれてゆく

■宇佐見英治自選随筆集『石の夢』(筑摩書房 1994.12)
「《なぜ賢治は、刻々移り変わる雲の形状や色合をとらえるのにあんなに度々鉱物や鉱石のメタフォールを用いたのだろうか》／私のこれまでの観念では、鉱物は地上の諸物のなかでももっとも堅牢な固体であった。(第一、石は大気に溶けたりしない。)鉱物は不壊、不動のもの、つねに自分のうちに自同性を保っている存在だと思われたのである。《賢治の隠喩が奇異に思えるのは、雲のように柔らかな気体、目に見えぬ大気の流れに、そのような不壊の固物を結びつけたということ、そればかりではない。もし賢治の隠喩が正しければ、ーー本当の神秘は、天空にある雲なり空の色合が、地中の奥深く、地殻の中に隠されているということだ。賢治は「亜鉛の雲」といい、「蒼鉛いろの暗い雲から／みぞれはびちょびちょ沈んでくる」という。なるほどいつか見たあの雲、山の端に垂れ込めて動かぬあの雲の一塊はたしかに亜鉛の重さと暗さをもち、ときに陽光に燦めいたり翳ったりしていたではないか。またここ数日、雨が降ったり止んだり森が雨空に閉ざされているが、午後から一段暗さを増して来たこの空の色を、蒼鉛いろという以外にどんな正確な名で呼んだらいいだろうか。》宮沢賢治のメタフォールに心をとめるにつれて、私は、次第にそう思い始めた。」

mediopos-95
2015.2.18



■山崎努『俳優のノート』(文春文庫　2013.10)
「リアは長い旅をした。／領地を捨て、王冠を捨て、衣服を捨て、正気を捨て、血縁を捨て、世を捨てる旅だった。唯我独尊のリアは、その狂気の旅の中で、他者を発見し、人間の悲惨を知る。コーディリアと再会。謝罪。新しい親子関係の成立。そしてコーディリアと牢に閉じこもる。「二人きり」の世界にたどり着く。慈しみ。コーディリアの死。狂気。死ぬ。生命を捨てる。／準備、稽古、公演と、この道をくり返したどり続けた。リアと一緒に。同行二人の旅だった。／リアとの旅はスリリングだった。／リアは絶えず、俺は変わっていない、最後まで変わっていない、と囁き続けているような気がした。お前は変わったのだ、と捻じ伏せた。今もまだリアの囁きは聞こえてくるようだが、しかし旅は終わったのだ。／リアよ、さらば。」

ぼくは旅している
何かを得
何かを捨て
何かを知り
何かを忘れ

世を得たのか
世を捨てたのかは知らない
正気か狂気かは知らない
幸運か不運かは知らない

自分は変わったのだろうか
変わっていないのだろうか
変わることを恐れているのだろうか
変わることを恐れていないのだろうか

まだ旅は終わらずにいる
自分にさらばというにはまだ早い

mediopos-96
2015.2.19

見るとき
私は世界をつくる

そのつくられた世界で
私は生きている

新たに見なければならないとき
私は世界観をつくる困難に直面する

世界観とは世界をつくることだ
異質な世界観のなかでは生きられない

そのとき私は世界を否定するか
みずからを否定することになる

■オリヴァー・サックス『火星の人類学者』(ハヤカワノンフィクション文庫　2001.4)
「こうして、「奇跡的に」視力を回復した盲人ヴァージルの物語は、基本的には一七二八年のチェルズルダンの若い患者や、そのほか過去三世紀の何人かと同じ経過をたどったが、最後は奇妙に皮肉なひねりがきいていた。グレゴリーの患者は、手術前は盲目の生活に非常によく適応し、視力を回復したあともはじめは喜んでいたが、まもなく耐え難いストレスと困難にぶつかって。「贈り物」が呪いと化したことに気づき、すっかり落ちこんで、ほどなく亡くなった。じっさい過去の患者の大半は、最初の有頂天の喜びが過ぎると新しい感覚に適応する困難さにうちのめされてしまったが、ごく少数はヴォルヴォが強調したようにうまく適応した。見える世界への適応には多くのひとびとが失敗したが、ヴァージルは困難を克服し成功したのだろうか。／それはもうわからなかった。適応佐合、そして彼の新しい人生は、運命のいたずらでふいに途絶してしまったからだ。たった一度の発作が彼から仕事も家も健康も自立心も奪い、自分を守ることもできない障害者にしてしまった。手術を勧め、ヴァージルの視力回復にあれほど心血を注いだエミーにとっては、不発に終わった軌跡であり災厄である。(…) だが、皮肉なことに二度目の決定的な盲目というかたちで、救いが与えられた。盲目を彼は贈り物のように受けとった。ついにヴァージルは見なくてもすむようになった。わけのわからないまばゆい視角の世界と空間から逃げることを許され、ほぼ五十年慣れ親しんだべつの感覚の世界に、ようやく身を落ち着けることができたのである。」

mediopos-97
2015.2.20

存在は悲しみである
人は悲しみとともに歩まねばならぬ

深い傷を受けたとき
悲しみとともに魂は変容する

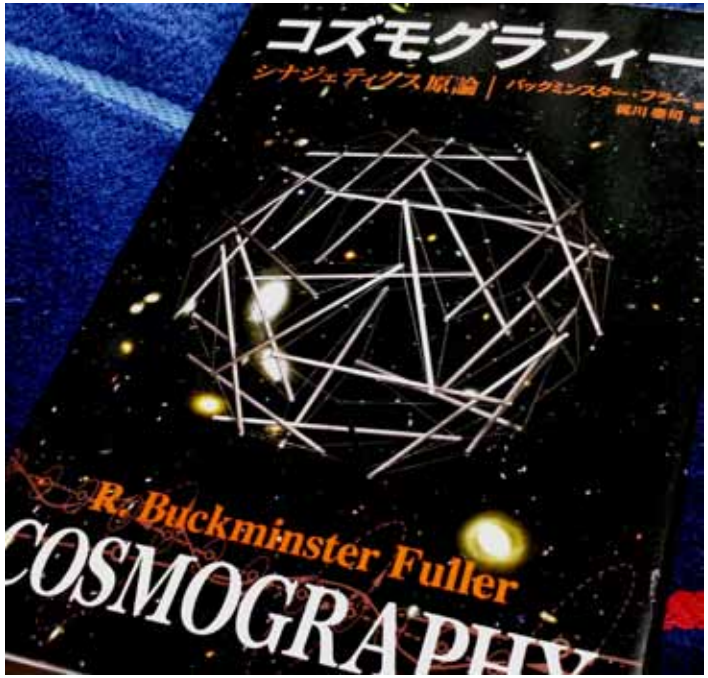
みずからの赴くべきところを求め
人は行くあてなく彷徨いはじめるのだ

悲しみが狂の深みへと至り
慈しみとなれば幸いである

狂とともにあるとしても
悲しみは同行二人を歩むであろう

■秋田巌『さまよえる狂気／精神学からの提言』(創元社　2012.1)
「人間は「傷」を受ける存在である。浅い傷は自己治癒力によって自然と消えていく。しかし人間存在が深く傷を受けるとどうなるか。ある時は“狂”へと転ずる。またある時はその「傷」こそが「為さねばならぬこと」を指し示し始める。／人間においては、「為したいこと」「為さなければならぬこと」の両者が二重螺旋構造のごとく絡み合いはじめると、それまでにはあり得ない力を稼働し始めることがある。――「破滅」か「破格」か――。“狂”に陥らぬため、指し示されるものの方向に向かって、苦しくはあろうが、歩を進め続ける。それが可能となった時、Disfigured Hero (「形、歪められたる英雄」「傷を生きる英雄」「破形の英雄」とでもなおろうか) 一元型とでも呼ぶべき力が働き始める。」

mediopos-98
2015.2.21



■バックミンスター・フラー『コズモグラフィー／シナジェティクス原論』(白揚社　2007.9)
「この惑星（地球）の人間が漸進的変化において現在直面している危機は、宇宙での存続をかけた最終審査である。審査の対象となるのは、政治や経済、または宗教のシステムではなく、個人の誠実さとすべての人間の責任ある思考と、漸進的変化の過程でますます加速的に増加する前例のない出来事に対する非利己的な反応である。／この前例のない出来事とは、あらゆる国家の歴史が終焉の時を迎えることに伴って、あらゆる支配を断ち切り、暗黒時代の牢獄から脱出することである。現在、地球規模の生産流通システムには、150 以上の領域に分割された国家経済による＜血塊＞がある。現在進行中の出来事は、全人類が＜連合した国家＞ではなく、ひとつの惑星を共有する人間となって無数の方法で結びつくための迅速な統合である。」「永遠に再生的な宇宙を支配する宇宙の知的な完全無欠正（インテグリティ）の包括的叡智と絶対の力と愛を完全に信頼する個人が、シナジェティクスの研究に継続的に専念すれば、「宇宙の支配権は、地球という小さな惑星の政治家や神官、軍事指導者をして貨幣経済の権力の支配者にすでに掌握され確定している」という、暗黒時代から続く誤った概念によって種を自滅に導く強迫観念から、人類は最終的に脱出できるだろう。／親愛なる読者諸君。人間の因習的な権力構造および闇を支配するその力は、今まさに陳腐化されつつあるのだ。」
＊創造してごらん：「想像してごらん」(Imagine/John Lennon)

創造してごらん
簡単なことさ

今ここにいることは
創造そのものだ

ぼくがいてきみがいて
そして世界がある

天国なんていらない
地獄なんていらない

正義の味方はいない
悪の手先はいない

ひとりじめしなくていい
犠牲なんていらない

創造してごらん
簡単なことさ

mediopos-99
2015.2.22

■夢窓国師『夢中問答集』(講談社学術文庫　校注・現代語訳　川瀬一馬　2000.8)
「本来の悟りの境地には、智者の相もなく、愚人の相もない。それなのに、妄りに智者・愚人の相を見る、これを愚人というのだ。それ故､智者･愚人の相を見ないのを､真実の智者というのだ。世間一般の愚かな人と違って、才智弁説があるのを智者と言うのは、世俗の沙汰である。この故に、本来備えているはずの大智を会得した人は、「おれは智者だ」と慢心を起こさない。そのわけは、本来の大智に行き当たってしまえば、智とか愚とかの差別の相を見ないからだ。おれは智者だと思っていても、智者のふりをしないというのではない。(･･･)／誰でも、本来備えている悟りの境地では、迷・悟、凡・聖の病巣のごときものはない。教と禅と、煩悩の苦を断つ法の説き方は、誰のために用うべきものなのか。けれども、迷いの病苦がたちまちに発って、種々身もだえする苦痛が生ずる。仏がこれを憐れんで大医王として、種々の性質・楽欲に随って、さまざまの教えを説かれた。仏法の教えは種々の差別があるけれども、その趣旨をつきつめれば、それはただ衆生の、迷・悟、凡・聖を分別する病気をなおして、本来具わった安穏の悟りの境地に到達させんがためである。種々の迷妄を断つ教法のあり方を衆生に教えようというためではない。誰でも、迷いの妄想という病苦がとりのけられてしまえば、生死の変化が輪廻するのも見ず、凡聖迷悟の差別もなくなる。これこそ、因縁の働きを断ち、煩悩の苦を脱れた人といってよい。これを大悟の人と名づける。教法を修める各宗派の内容を究めつくし、禅宗の五つの派の行き方を会得したのを、大悟というのではない。それなのに、末代の今の世の仏道修行者の中には、教法を習学し、禅法を呑み込んで、仏法の本意はこのようなものだと思っている人がある。薬がかえって病気を発するというのは、この意味である。そこで、古人は、これをば教病・禅病と名づけたのである。」

光を教えることはできない
ただそれを見るだけだ

闇を教えることはできない
ただ光なきを見るだけだ

智を教えることはできない
教えられた智はすでに慢心となる

愚を教えることはできない
ただ智なきを生きるだけのことだ

聖を教えることはできない
教えられた聖はすでに病である

俗を教えることはできない
ただ聖なきを生きるだけのことだ

生を教えることはできない
ただそれを生きるだけだ

死を教えることはできない
ただ生を超えてゆくだけだ

mediopos-100
2015.2.23

みんな同じは疑わしい
違うことが目的ではないけれど

正しさは疑わしい
絶対が加わるともっと疑わしい

正気は疑わしい
まわりのみんなはものさしにならない

ひとつの中心は疑わしい
すべてがどこでも中心であるように

■イドリース・シャー『スーフィーの物語／ダルヴィーシュの伝承』(平川出版社　1996.7)
「昔々、モーゼの師のハディルが、人間に警告を発した。やがて時がくると、特別に貯蔵された水以外はすべて干上がってしまい、その後は水の性質が変わって、人々を狂わせてしまうであろう、と。／ひとりの男だけがこの警告に耳を傾けた。その男は水を集め、安全な場所に貯蔵し、水の性質が変わる日に備えた。／やがて、ハディルの予言していたその日がやってきた。小川は流れを止め、井戸は干上がり、警告を聞いていた男はその光景を目にすると、隠れ家に行って貯蔵していた水を飲んだ。そして、ふたたび滝が流れはじめたのを見て、男は街に戻っていったのだった。／人々は以前とはまったく違ったやり方で話したり、考えたりしていた。しかも彼らは、ハディルの警告や、水が干上がったことを、まったく覚えていなかったのである。男は人々と話をしているうちに、自分が気違いだと思われているのに気づいか。人々は彼に対して哀れみや敵意しか示さず、その話をまともに聞こうとはしなかった。／男ははじめ、新しい水をまったく飲もうとはしなかった。隠れ家に行って、貯蔵していた水を飲んでいたが、しだいにみんなと違ったやり方で暮らしたり、考えたり、行動したりすることに耐えられなくなり、ついにある日、新しい水を飲む決心をした。そして、新しい水を飲むと、この男もほかの人間と同じになり、自分の蓄えていた特別な水のことをすっかり忘れてしまった。そして仲間たちからは、狂気から奇跡的に回復したと呼ばれたのであった。」